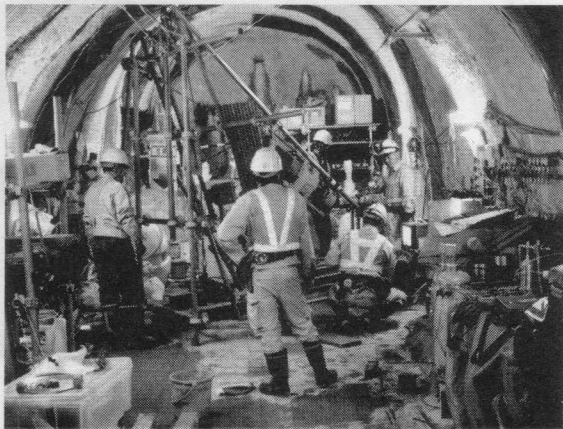


地下 300m の坑道は、湿度が少し高いようだった。パイプが目につく。吹き出す地下水が多いようだ。

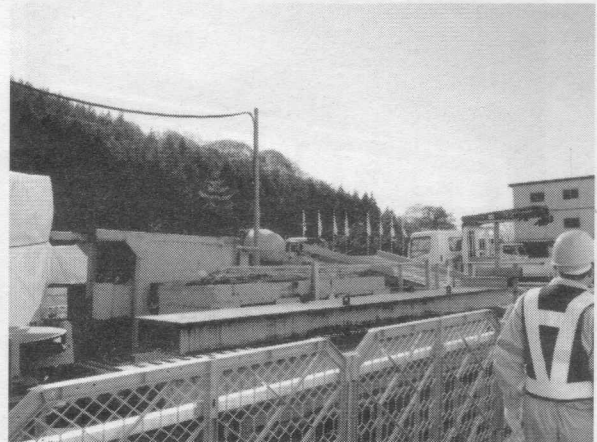


現在、さらに深い地下 500m でも研究アクセス坑道が掘られ調査研究が進められている。



気になったのは、地上施設の正面側にあった排水処理施設。当初こんなに大きな処理施設を作る予定ではなかったのか急ごしらえで増設したように見える。坑道に吹き出す地下水が想定以上に多かったようだ。しかもこの地下水、想定外のフッ素とホウ素が含まれており処理費用が随分かかっているとのことだった。

ご案内、説明いただいた研究所のみなさんには好感がもてた。国民の理解を得ながら調査研究を続けたいという思いが伝わってきた。



↑ 地下水の処理施設

なくずして最終処理施設に？！

汚染は名古屋へも

見学後、近くの交流館をおかりして市民ネットの方との学習・交流会を行いました。

市民ネットの方が危惧しているのは、調査研究施設といいながら、結局この瑞浪の地下に最終処分施設が作られる可能性だった。

この東濃地域を対象に広い範囲で地層の調査が実施されており、地殻が安定しているとして巨大な最終処分施設が建設される可能性があるという。

地下 500m の坑道に高濃度の放射性物質が処分された場合。最初の数百年はガラスや金属ケースで密封されているが、これらがいずれ朽ち果て、地下の岩石と一体となる。この時、地下水への汚染は大丈夫なのだろうか。ネットの方は現在の調査坑から吹き出ている地下水を「毒水」と呼んでいた。研究施設の現状をみてみると、明らかに想定外の地下水の流れがこの地底にはあるようだ。まさに掘ってみなければ分からないことがある。